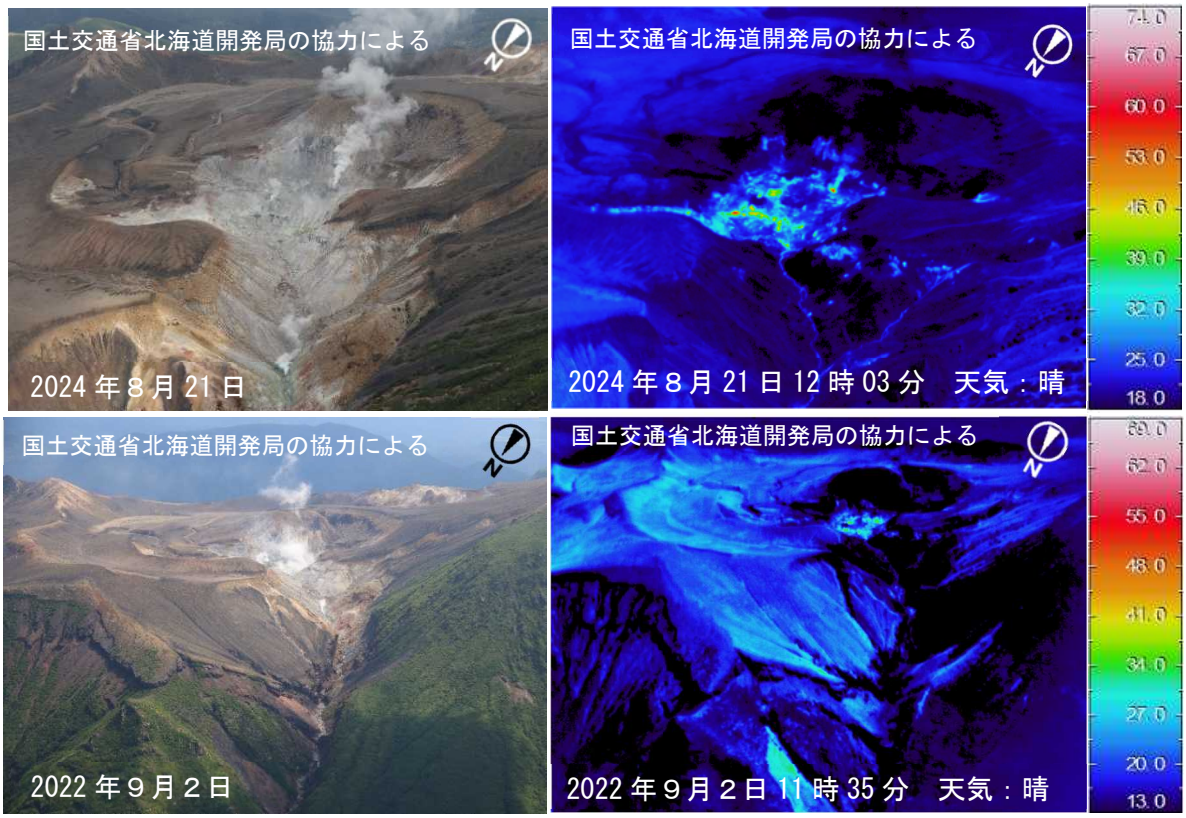


図 13　雌阿寒岳　赤外熱映像装置による中マチネシリ火口の地表面温度分布
上：北西側上空（図１の⑨）から撮影　下：北西側上空（図１の⑩）から撮影

・噴気の状況や地熱域の状況に特段の変化は認められませんでした。

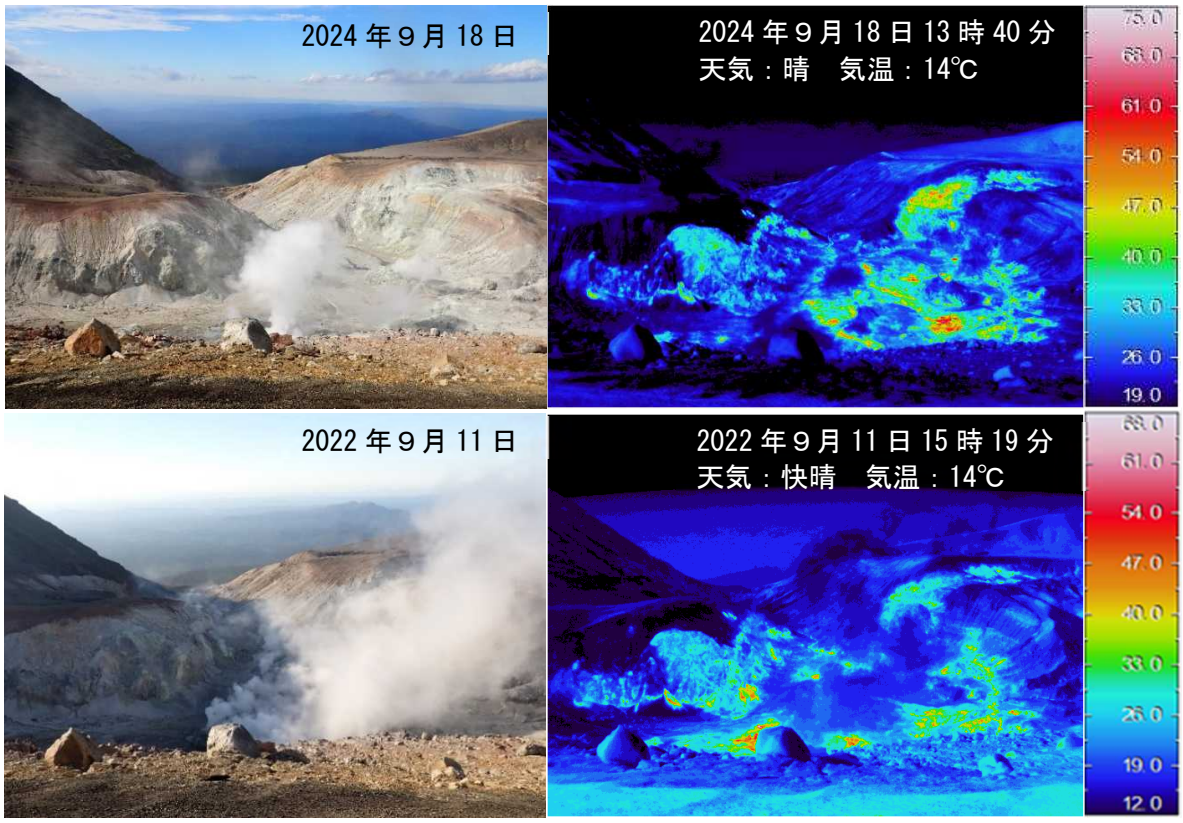


図 14　雌阿寒岳　赤外熱映像装置による中マチネシリ火口の地表面温度分布
東側（図１の⑪）から撮影

・前回（2022 年９月）の観測と比べ、火口内の熱泥の湧出や噴気の状況にわずかな変化はあったものの、熱活動の活発化を示すような特段の変化は認められませんでした。

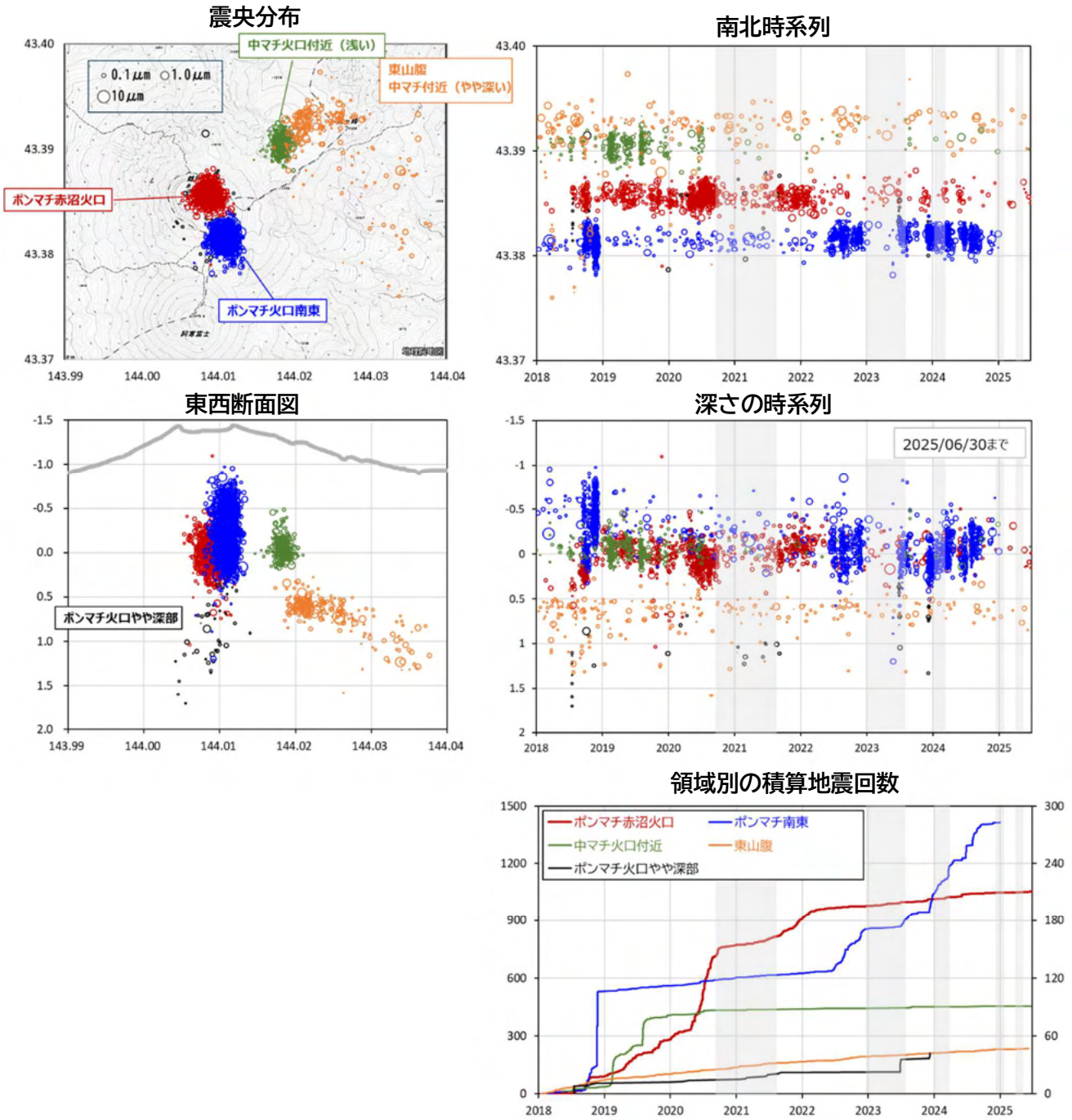


図 15　雌阿寒岳　火山性地震の領域別震源分布図（2018 年～2025 年６月 30 日）

・領域別の積算地震回数は、震源が求まった地震のみを計数しています。
・震源の大きさは、オンネトー南東観測点の変位波形のUD成分の大きさによって変化させています。
・灰色のハッチを掛けている期間は、観測点の障害等で震源が求まりにくかった期間を示します。

・今期間はいずれの領域でも概ね低調に経過しています（図４も参照）。

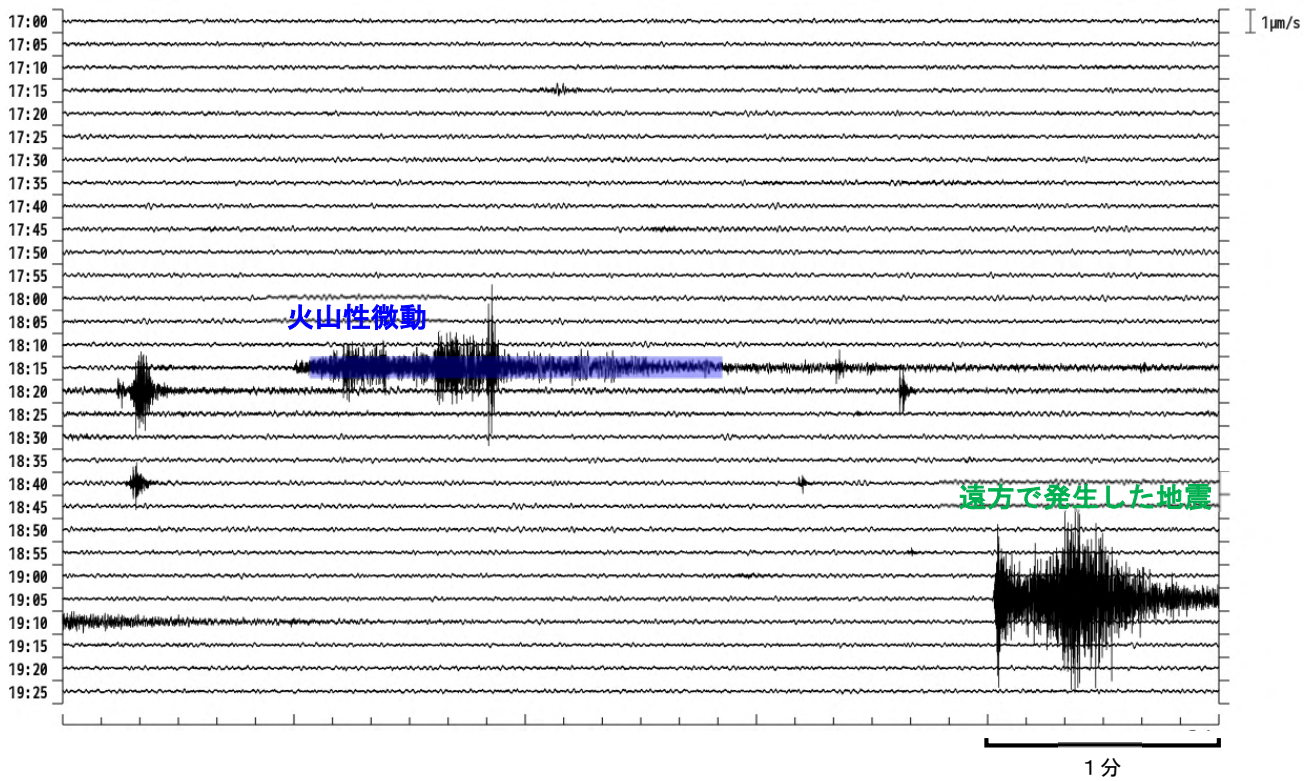


図16　雌阿寒岳 オンネトー南東の速度波形上下動成分（2024年11月６日17時00分～19時30分）

・11月６日18時16分頃から継続時間が短く、振幅の小さな火山性微動を観測しました。火山性微動の発生前後に火山性地震の発生状況等に特に変化は認められませんでした。

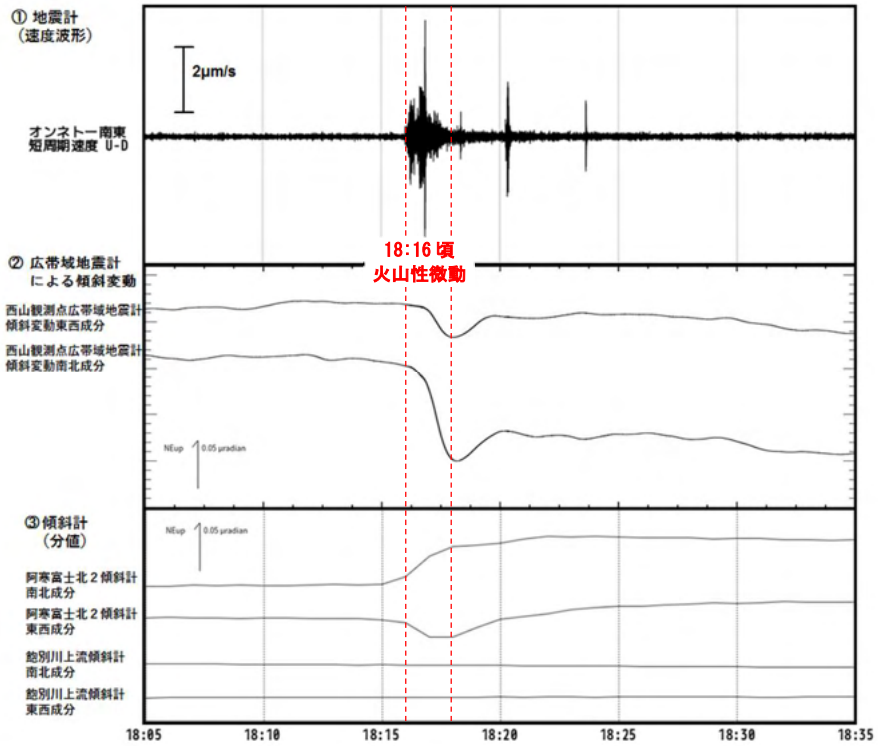


図17　雌阿寒岳　2024年11月６日に発生した火山性微動とそれに同期した傾斜変動の推移
（2024年11月６日18時05分～18時35分）

②及び③はいずれも傾斜変動の推移を示していますが、観測機器の特性、サンプリング間隔がそれぞれ異なる事から、変動の開始や極値、鈍化のタイミング等の比較には留意が必要です。

・山頂付近の阿寒富士北２観測点（傾斜計）、西山観測点（広帯域地震計）で、11月６日に発生した火山性微動と同期して、ポンマチネシリ火口方向が上がるわずかな傾斜変動を観測しました。

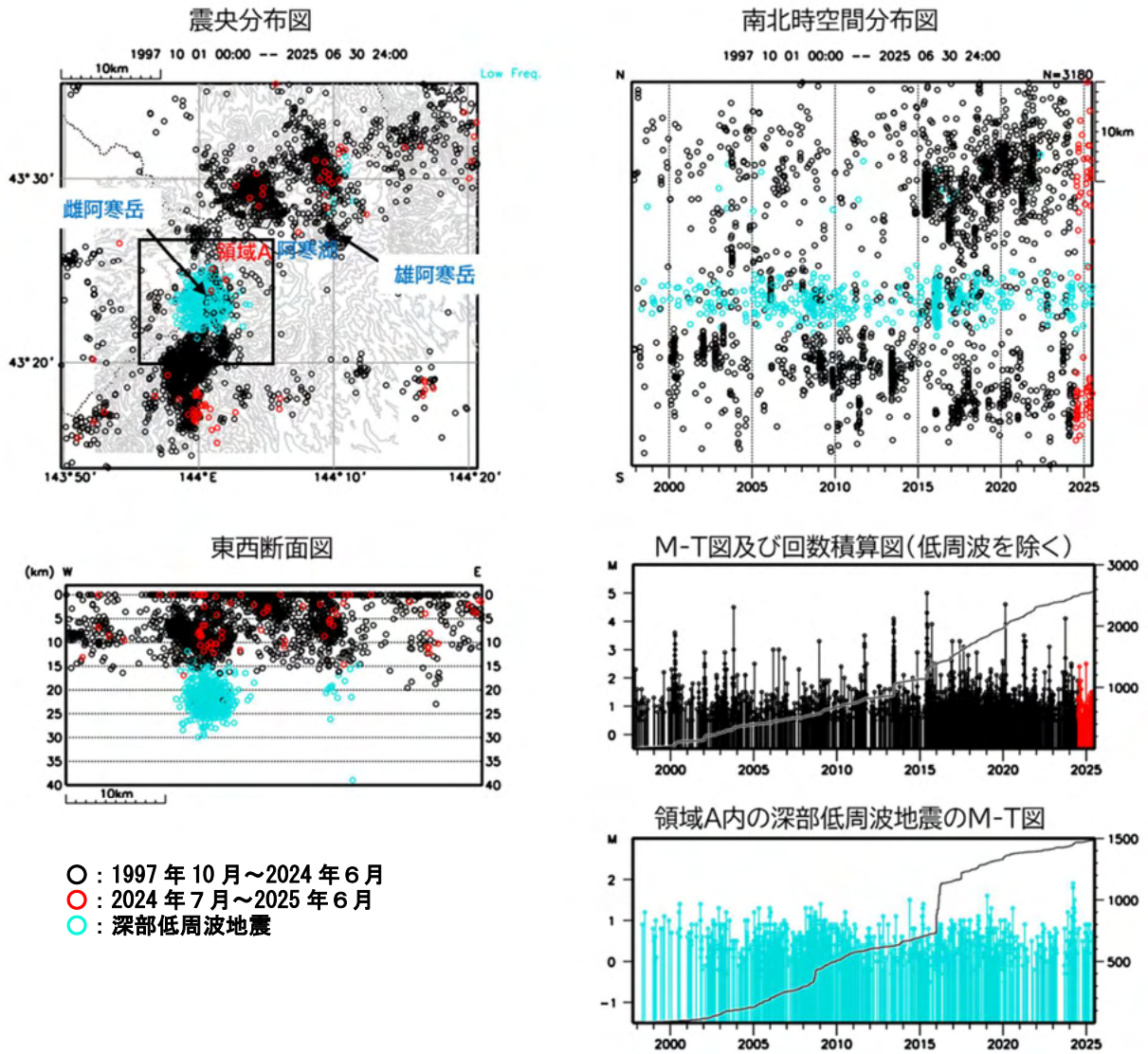


図18　雌阿寒岳　一元化震源による周辺の地震及び深部低周波地震
（1997 年 10 月１日～2025 年６月、マグニチュード≧0.5、深さ 40km 以浅）

・雌阿寒岳周辺の地震活動、直下深部の深部低周波地震の活動とも、近年はやや減少傾向がみられています。

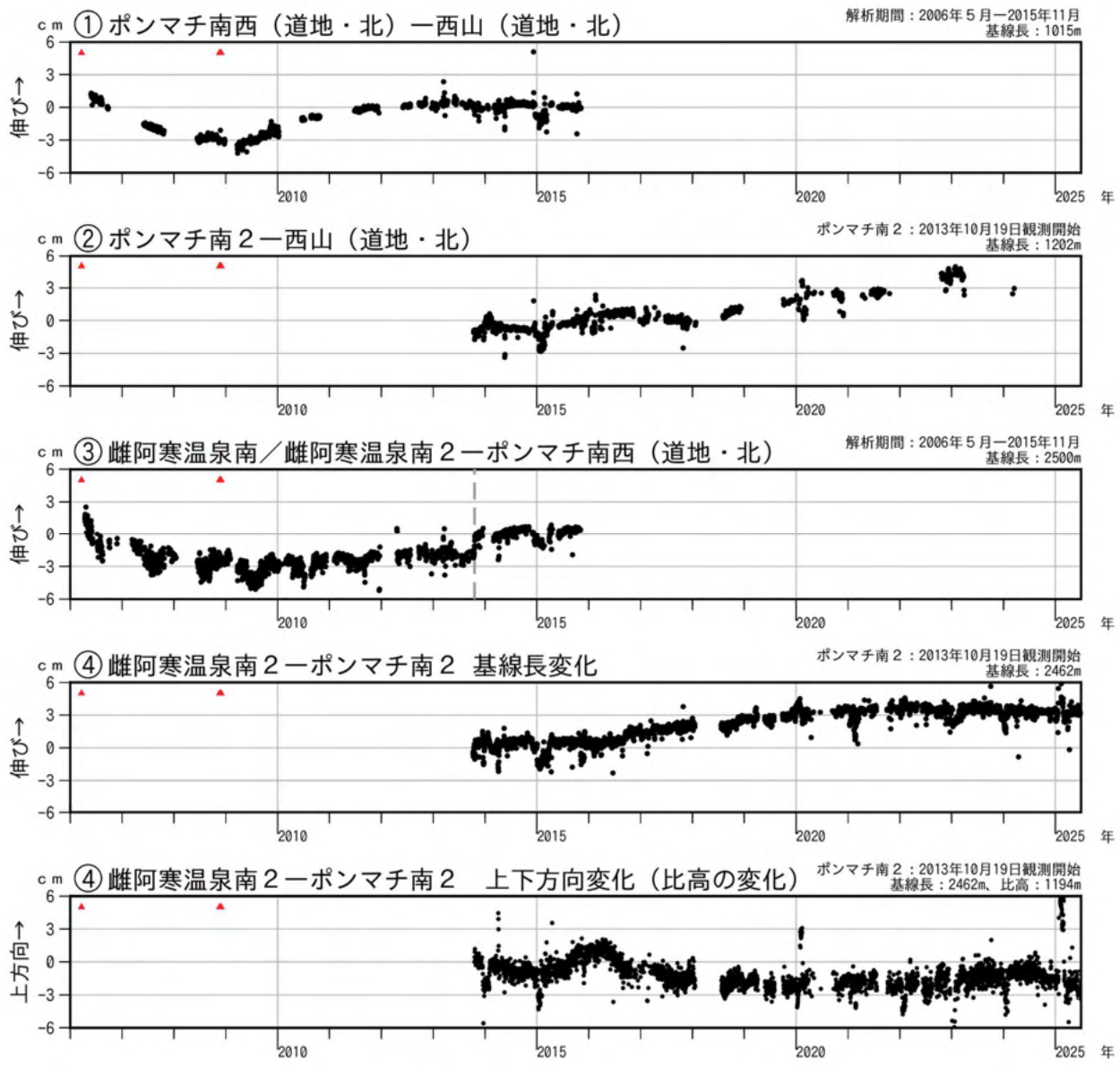


図19-1　雌阿寒岳　GNSS連続観測による基線長及び比高の変化（2006年４月～2025年６月）

・グラフ①～④はGNSS連続観測の基線図（図21）の基線①～④に対応しています。
・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南２はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線②は①、基線④（基線長）は③と類似した推移を観測していると考えられます。
・基線③の点線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南２に観測点を移設しています。
・グラフ④は基線④の基線長と比高を別個に描画しています。比高は雌阿寒温泉南２からみたポンマチ南２の上下方向の動きを表しています。
・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

・基線④（比高）では、2022年頃からポンマチネシリ火口付近浅部の膨張及び収縮を示唆するわずかな隆起及び沈降が認められましたが、2024年11月頃以降は概ね停滞しています。

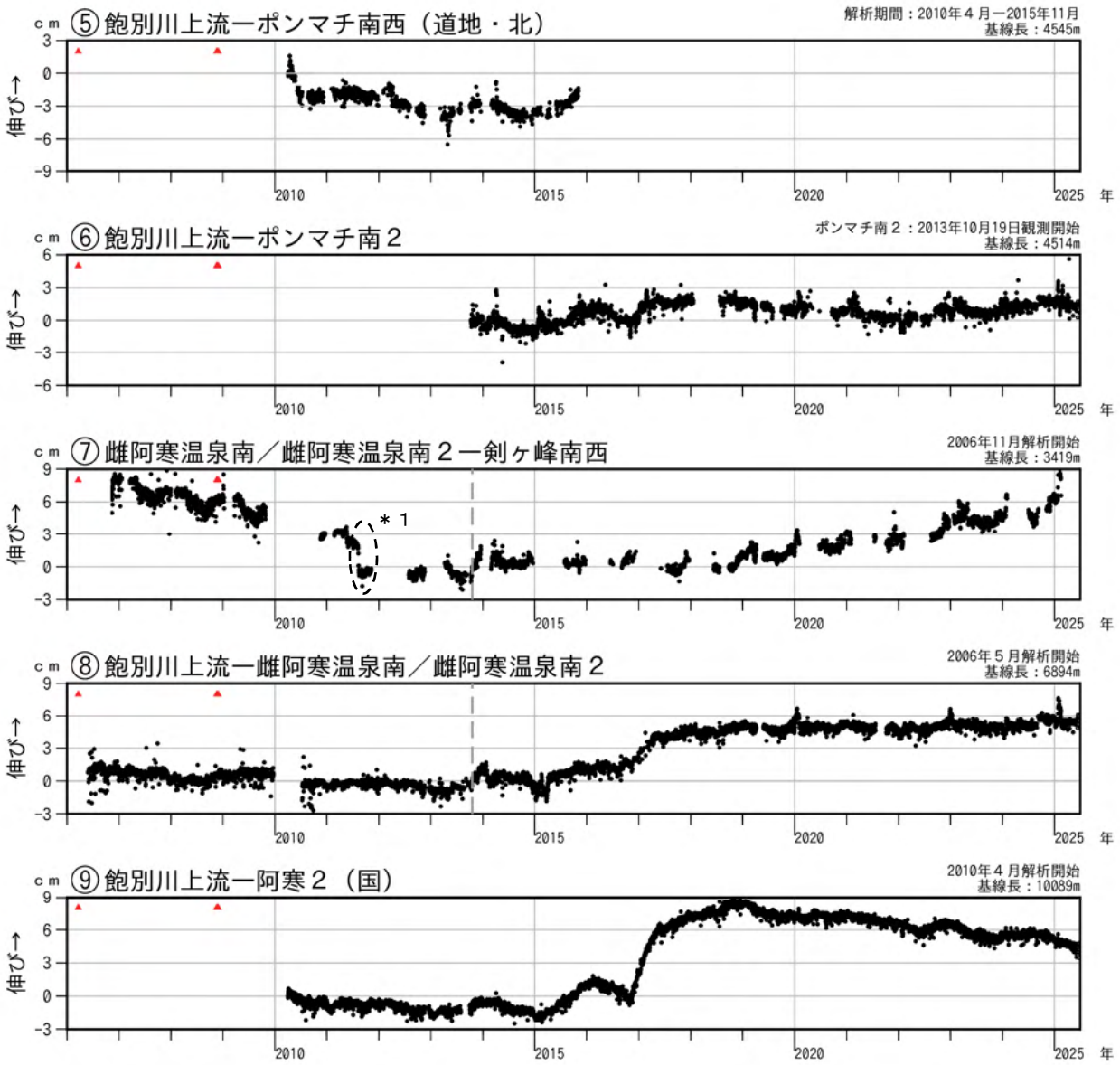
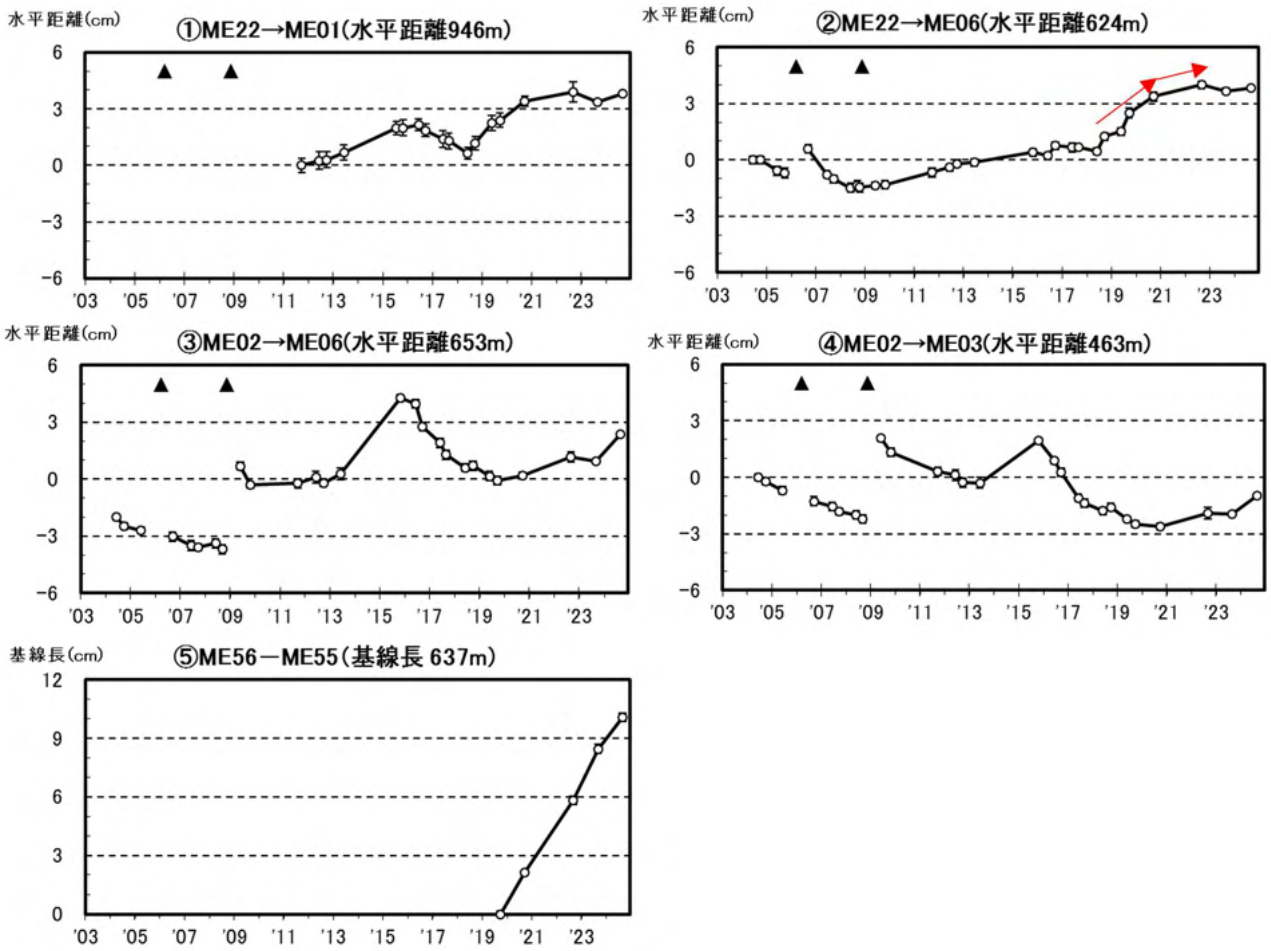


図19-2　雌阿寒岳　GNSS連続観測による基線長の変化（2006年４月～2025年６月）

・グラフ⑤～⑨はGNSS連続観測の基線図（図21）の基線⑤～⑨に対応しています。
・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
・＊１：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。
・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南２はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線⑥は⑤と類似した推移を観測していると考えられます。
・基線⑦⑧の点線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南２に観測点を移設しています。
・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。

・基線⑦では2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆するわずかな伸長が認められます。
・山麓の観測点同士の基線⑧⑨では、特段の変化は観測されていません。



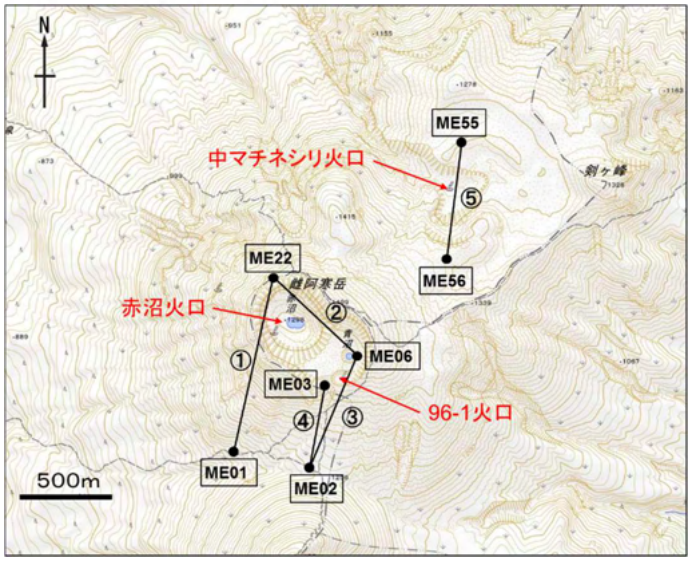


図20　雌阿寒岳　GNSS繰り返し及び連続観測による水平距離及び基線長変化（2004年６月～2024年９月）と観測点配置図

図中の▲は、2006年３月及び2008年11月のポンマチネシリ火口付近からのごく小規模な水蒸気噴火を示します。

・赤沼火口付近（基線①②）では、2018年頃からみられていた伸長の変化は2020年頃から鈍化し（赤矢印）、2022年以降は明瞭な変化は認められていません。
・96-1火口付近（基線③④）では、2020年頃以降、わずかな伸長がみられています（青矢印）。
・中マチネシリ火口付近（基線⑤）では、2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆する基線の伸長が続いています（黒矢印）。

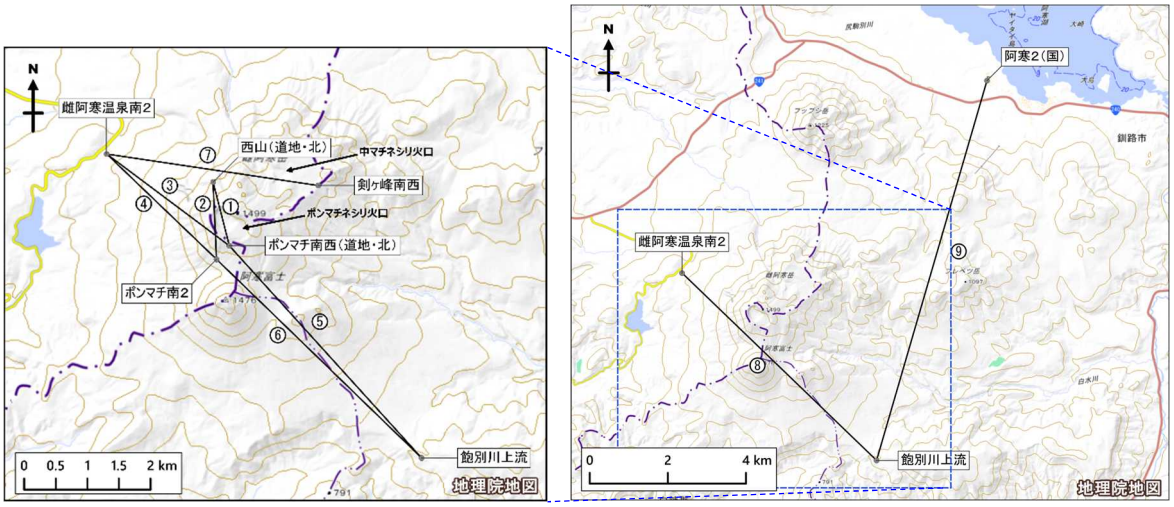


図21　雌阿寒岳　GNSS連続観測の基線図

・基線番号①～⑨は、図19のグラフ①～⑨に対応します。
・基線④、⑦は、それぞれ図４のグラフ③、⑥に対応しています。

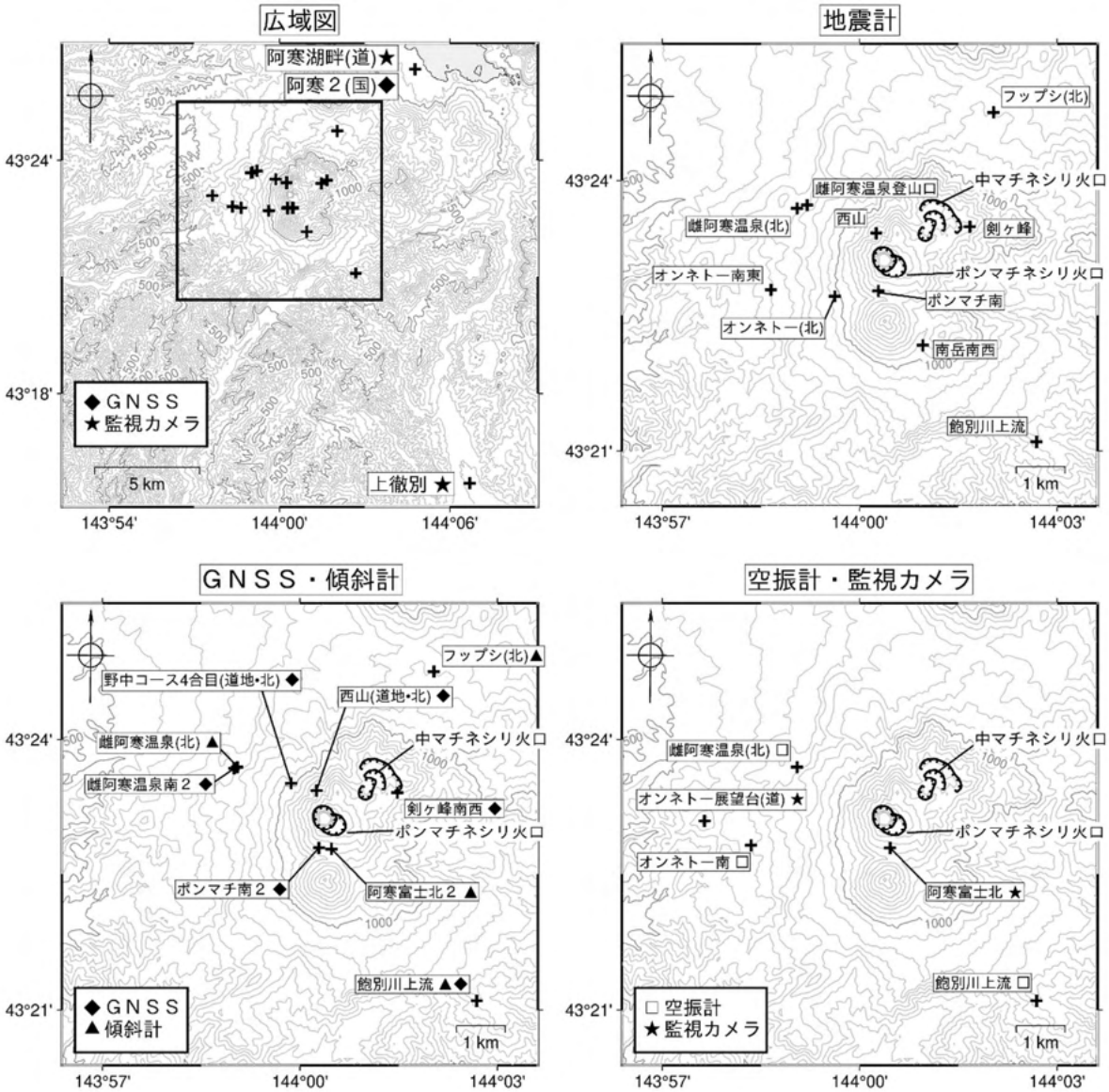


図22　雌阿寒岳　観測点配置図

各機器の配置図は広域図内太枠線で示した領域の拡大で、＋印は観測点の位置を示します。気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。
（国）：国土地理院　　（北）：北海道大学　　（道）：北海道
（道地）：北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所